

5 沖縄周辺重要水産資源調査

喜屋武俊彦外2名

1. 目的

沖縄周辺海域で網漁業、一本釣漁業の対象となる主要魚種について資源調査を恒久的に実施し、それぞれの資源の生態、資源の変動法則を明らかにして、沿岸近海漁業の管理および合理的生産体系の確立をはかる。

2. 材料および方法

カツオ一本釣（本部、宮古、八重山）、カツオ類ひき縄（糸満）、タカサゴ類（県漁連）、トビウオ類（県漁連、糸満）の魚種と地区で次の様な調査を行う。

1) 個体生態調査

漁獲物を通じて成長と年齢、成熟、産卵、系統群、回遊等について知見を得る。

a) 体長測定調査

b) 体長、体重調査

c) 胃内容物、生殖腺調査

2) 漁獲量調査

a) 水揚地調査

b) 標本船調査

3) 標識放流調査

3. 結果

カツオ一本釣

昭和53年度の本部の近海カツオ一本釣漁獲量は273,199kgで前年の58.8%で昭和41年以降最低の漁獲量であった。漁期は4月から10月、盛漁期は6月であった。前年に比べて、1隻減船し4隻であった。宮古島の近海カツオ一本釣漁獲量は12隻出漁し、1,002,636kgで前年の115.9%で増加した。漁期は5月から10月まで、盛漁期は7月、石垣島の近海カツオ一本釣の漁獲量は820,848kg、前年の111.6%で増加した。標本船、調査船凶南丸のカツオ漁場調査より沖縄近海のカツオは大、中判が主体であった。

本部のカツオ餌料魚は標本船によると、サッパとインドアイノコ属が主体で約16.5トンの採捕であった。

南方基地のカツオ一本釣は3月～12月までに54隻出漁し、57,868.5トンの漁獲量で前年比191.6%で大巾に増加した。基地別漁獲量はラバウル、22,620.9トン、ソロモン、17,748.9トン、キャピアン、13,593.5トン、パラオ、3,904.8トンであった。

ひき縄（糸満）

糸満漁協に水揚されたひき縄の総水揚量は47,453.2kgで前年の112.5%で増加したが、

マグロ類及びシイラは減少した。盛漁期はカツオ類、シイラは5月、サワラ、カジキは6月、マグロ類は12月であった。総水揚量に占める各魚種の割合はカツオ類18.7%、マグロ類、11.6%、サワラ34.5%、カジキ、19.0%、シイラ、16.3%であった。

タカサゴ追込網（県漁連）

県漁連の追込網の水揚量は626,711.4kgでタカサゴ類が総水揚量の96.3%、67,700.5kgで前年の113.9%、平年の166.1%であった。

標本船の水揚量は前年の123.5%であった。

トビウオ類

糸満漁協に水揚されたトビウオ類は5,980kgで前年の67.7%、県漁連に水揚されたトビウオ類は21,468.7kgで前年の49.1%でそれぞれ減少した。糸満漁協の漁期は4月～7月、県漁連は4月～9月で盛漁期は同じで5月であった。

3 市場における主要魚種水揚量

沖縄県漁連、那覇地区漁協、糸満漁協に水揚されたハマダイ、ハマフエフキ、スジハタ類、アオリカの4魚種について水揚量を調査した。県漁連に水揚されたハマダイは33,996.2kgで前年比99.2%、スジハタ類は76,729.8kgで前年比101.2%、アオリカは49,283.0kgで前年比88.3%であった。那覇地区漁協に水揚されたハマダイは134,699.0kgで前年比92.7%、ハマフエフキは87,300kgで前年比30.3%、スジハタ類は1,530.0kgで、前年比15.2%、アオリカは2,836.5kgで前年比139.2%であった。糸満漁協に水揚されたハマダイは12,692.8kgで前年比80.9%、ハマフエフキは22,285.3kgで前年比131.2%、スジハタ類は14,315.3kgで前年比133.8%、アオリカは8,458.8kgで前年比129.8%であった。

個体生態調査

カツオ釣のカツオの体長、体重を459尾、キハダを30尾測定した。胃内容物、生殖腺調査はカツオ63尾、キハダ10尾調査した。ひき縄ではヒラソーダ52尾、カツオ25尾、体長、体重、胃内容物、生殖腺調査を行なった。タカサゴ類では体長、体重を1,582尾測定し、胃内容物、生殖腺調査は384尾調査した。トビウオ類は糸満、県漁連の両方で体長、体重を153尾測定し、胃内容物、生殖腺調査を42尾調査した。

標識放流調査

図南丸で5月に25尾、9月に174尾標識放流を行った。

考 察

本部のカツオ1本釣は前年の60%と悪く、それは沖縄北西ソネ付近の中層水温が低目に推移し、黒潮逆流がみられなかったためと思われる。宮古では活餌のタカサゴ類幼魚が多く発生し、鳥付主体の中大判群が島回りに多くみられ漁は良かった。タカサゴ類の沖縄本島周辺海域から漁獲される量は横ばい状態であるが、近年、八重山、宮古から空輸される量が増加し、総水揚量は

6月、マ
類、11.6
増加傾向を維持している。トビウオ類は糸満漁協では隔年変動の傾向があり、今年是不漁年にあ
たった。那覇地区漁協のハマダイを除く底魚類、イカ類が極端に少ないのは、今まで那覇地区漁
協に水揚していた小型船が那覇沿岸漁業協同組合の新設に伴ないそこに水揚したためと思われる。

要 約

7,700.5
この事業は国の委託で昭和53年度沖縄周辺重要水産資源調査要綱に従って行なわれた。対象
魚種はカツオ類（カツオ1本釣、ひき縄）タカサゴ類（追込網）、トビウオ類（流し刺網、追込
網）で地域は県漁連と糸満漁協、本部、宮古、八重山である、これに関連して県漁連、那覇地区
漁協、糸満漁協のセリ帳から重要魚種の水揚量を調査した。

カツオ1本釣

たトビウ
7月、県
本部は不漁で宮古、八重山は漁は良かった。いずれも中大判主体で活餌は本部がサッパ、イン
ドアイノコ属主体、宮古、八重山はタカサゴ幼魚が多かった。

ひき縄

タ類、ア
カツオ類、サワラ、カジキは漁が良くマグロ類、シイラは悪かった。

タカサゴ類

6.2kgで
283.0
近年増加傾向にあり、特に宮古、八重山からの水揚が多かった。

トビウオ類

で前年比
、前年比
県漁連、糸満漁協とも漁は悪かった。

主要魚種

れたハマ
1.2%、
129.8
県漁連のハマダイ、ハマフエフキ、スジハタ類は前年並でアオリイカが若干減少した。那覇地
区漁協のハマダイは若干減少、ハマフエフキ、スジハタ類は大巾に減少、アオリイカは増加した。
糸満漁協のハマダイを除き他は増加した。

個体生態調査

殖腺調査
、体長、
し、胃内
を153
カツオ類、マグロ類を1本釣、ひき縄の漁獲物から566尾体長、体重を測定し、生殖腺調査
を150尾調査した。タカサゴ類は体長、体重1,582尾、生殖腺、胃内容物384尾それぞれ
測定、調査した。トビウオ類は体長、体重53尾、生殖腺、胃内容物42尾測定、調査した。

標識放流調査

図南丸で計199尾標識放流した。

なお、調査結果等の詳細は「昭和53年度沖縄周辺重要水産資源調査結果報告書」として別冊
で行う。